

◇紙 碑◇

山中千恵子さんを悼んで

三浦正子

昭和54年7月24日、私のかげがえのない友達山中千恵子さんは肝臓ガンのため亡くなりました。わずか33才という若さでした。

千恵子さんと私の初めての印象に残る出会いは、入学式も終り学校にも少し慣れてきた頃でした。山の上の学生会館のロビーにすわっていると、ガラスごしににっこり笑って近づいていらっしやいました。ほっそりした長身に地味なブレザー、色白なお顔に愛くるしい笑顔をかべられたそのお姿を今でもはっきりと覚えています。

6月末に今は南極探検で活躍していらっしやる極地研の吉田栄夫先生の巡検で浅間山方面に出かけましたが、私達2人は坂道に弱く先生や上級生の方々に励まされてようやく終えることができました。そんなことから急速に親しくなり、それからの大学生活は千恵子さんなしでは考えられません。学校生活はもちろん休みにはグループで旅行をし、お互いの家に泊まりあいつも一緒でした。4年の卒業の時私のフィールドが静岡県清水市の三保で千恵子さんの御実家に近かったこともあって一緒に来てくださり、式先生や大学院の方達とフィールドをまわったこともなつかしい思い出です。千恵子さんはいつも明るく笑顔が絶えたことがなく、のんびり屋でこせこせしたところのない方でした。それでいて芯はしっかりしていらして御自分の意見を持っていらっしやり、心配症の私はいつも励まされました。大学の3年の秋に手術を受ける大病をなさりさぞおつらかったのではと思いましたが、いつ病院にうかがってもおだやかで明るい笑顔で迎えてくださいました。

卒業後は不二聖心女学院で教えられるかわら、自宅でも中学生の数学をみていらっしやいました。昭和48年に結婚され教職は退かれましたが、その後も自宅で英語、数学を教えられたり御自身も英会話の学校等に通われたり、決して御丈夫とはいえなかったのにいつも積極的な姿勢で、育児疲れ気味だった私の力になってくださいました。

昨年3月末にお体の変調を訴えられて入院なさり、容体のよろしい時に一度だけお目にかかることができました。あいかわらずあのやさしい明るい笑顔で迎えてくださり「今度の病気は長くなりそうなのよ。でも直すよりしかたがないわよね。」とおだやかな中にもきっぱりとおっしやり愚痴ひとつありませんでした。その後は容体がお悪くなられ私にとってこれが千恵子さんとのお別れとなりましたが、それからも「つらい苦しい」とのおことばは最後までなく、献身的な看病をなさった御主人様、御両親様のことを気遣っていらしたそうです。つらい病気との闘いの中でおやさしさの中にも毅然としていらした千恵子さんのお姿に私は深い感銘を覚えたのでございました。短い一生ではいらっしやいましたが、御主人様、御両親様の深い愛に包まれ、せいっぱい生きぬかれた千恵子さんの御生涯はおしあわせであったと固く信じております。山中千恵子さんの御冥福を心よりお祈り申し上げます。

(16回生)